

宣教師フルベッキの提案により、日本に日曜休日制が導入されたのは、1876（明治9）年です。それは、政府が「富国強兵・殖産興業」をスローガンに、近代国家としての体裁を整えようと邁進していた時期でした。彼は、日本人が近代化の先に幸せを夢見ながら、妄信的に働く姿を懸念したのかもしれませんが。また、「何かを手に入れよう」とする近代化の流れのなかで、明治期のキリスト者達が、禁酒禁煙等の「何かを手放そう」とする生活信条を設けていったことにも意味深さを感じます。

預言者アモスは、北イスラエル王国の繁栄を冷ややかに見えています。人々は最初、儲けを増やして豊かになりたいと考えていただけでしょう。しかし、儲け心に火がつくと、とめどもなく広がり、ごまかしへのめり込んでいったことを本日の聖書箇所が伝えています。人は、自分に足りないもの、欠けているものに目を向けがちです。それ故に、何かを足すこと、埋めることで幸せが手に入るという感覚に強く支配されがちでもあります。しかし結局、人はどこまでも不完全ですから、何かを「足していく・埋めていく」ことで得る高揚感には限界があることも事実です。本日の箇所で記されている商人の不正もまた、「自分に足りないものを必死に埋めるために」「利益を得るといふ高揚感を絶やさないために」と追い求めているなかで、いつの間にか引き起こされていった悲劇であると見ることができます。アモスは、富や欲望に仕える恐ろしさ、命と国の滅びをここに見ています。

アモスは、人々が富を得ることに心奪われ、仕事休みである「新月祭」や「安息日」を「いつ終わるのか」（5節）と軽んじている姿を批判しています。そもそもユダヤ人達は、これらの休日を、神に実りの一部を捧げる日、社会的弱者に土地を解放する日として定めていました。もともとは神が創造された万物から手にした恵みであり、それを定期的に神に感謝してお返しすべき、手放していくべきだと考えたのです。私たちは、もともと、お金も、地位も、命でさえも、最後には手放していく人生のなかを歩んでいます。けれども、主イエスは「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである」（マタイ 10:39）という世界観を示されました。例えば、自分の主張やプライドを一度手放して、相手の話を受け止めようとしてみる…そうやって自分から何かを手放していくなかで、実は私たちは本当に重要なものに気づかされ、それが与えられていくということがあるようです。

七日目がくる度に、私たちは、今週何を手放すことができたのか、主イエスにおいて振り返り、神のもたらす幸いに与らせていただく者でありたいと願います。

（文責：望月達朗牧師）

